マーガ

蝶野夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マーガ

【Ｎコード】
Ｎ６２１２Ｘ

【作者名】
蝶野夜

【あらすじ】
灰岡大輝は日々女子に言い寄られる生活にうんざりし、普通の青春を謳歌することを望んでいた。平和な学園生活を送るために偽装の恋人として選んだ相手は学園で有名な魔女徒花星羅、二人は不幸を前提に付き合い始めるのだが……

前提は不幸

この学園には魔女がいる。

全校生徒がそれを知っているのは、校長公認の下、様々な特例によってあまりにも厚かましく存在するからだろう。

徒花星羅（あだばなせいら）、今年入学したばかりの高校一年生、十五歳だ。

彼女は魔女であって、魔術師ではあるが、魔法使いではなく、ましてや魔法少女でもない。見た目に反して白魔術が専門であって黒魔術には決して手を出さないと言う。

魔女の分類など彼らにはわからない。アニメやゲームの世界のような現実味のない言葉にしか聞こえないはずだ。

だが、箒に跨って空を飛んだり、釜で怪しい色の液体を煮たり、杖を持っていたりしていることもない。しわくちゃの顔でもなければ、鉤鼻でもない。三角の帽子を被っていなければ、マントを羽織っているわけでもない。

誰もが想像するような魔女と彼女の言う魔女は異なっている。

風貌は決して普通だとは言い切れないところもあるのだが、美少女と言ってまず問題はないだろう。

眉のあたりで一直線に切り揃えられた前髪とサイドを顎の辺りで切ったいわゆる姫カットで、いつも黒いフードのついたケープをしている。これが帽子とマントの代わりだと言えなくもない。

成績は極めて優秀、入学式で新入生代表挨拶を頼まれるほどで、先日の中間テストでもトップに名を連ねていた。

頭脳明晰、容姿端麗、本人にそれを鼻にかけた様子はないが、あまりに異質なために敬遠されがちである。

問題は彼女自身よりも、連れている黒猫の方なのかもしれない。

胸元に白い毛があり、厳密には真っ黒ではないその猫は水色と金

ともとれる茶色のオッドアイを持ち、実に神秘的だ。
だが、このノスフェラトゥが本当に不気味なのだ。
そもそも、ノスフェラトゥ（吸血鬼の総称）という名前が不気味であって、普段はほとんど鳴かないが、目を合わせて鳴かれたら不幸が訪れるという噂だ。
実際、興味本位でノスフェラトゥに近付き、悪戯をしようとした人間は自身や身内に悪いことが起きたと言っている。
偶然ともとれるが、それについては星羅自身が証明しているとも言える。
そもそも、普通ならば校舎の中に猫がいるはずなどないのだが、それが許されるには深い理由があるのだ。
未だに嫌がる教師もいるが、特例として認められてしまっている。
初めは誰もが校内に猫などいてはならないとノスフェラトゥを追い出そうと躍起になったのだ。
しかし、暴れるノスフェラトゥを無理矢理学校の外に出したその日、星羅は大怪我をしそうになった。
廊下を歩いていたところ、ボールが飛んできて窓ガラスが割れ、彼女はそれを浴びる形になった。
その一度だけではない。廊下でふざけていた生徒が飛ばした上履きで蛍光灯が割れ、真下には彼女がいたが、彼女はフードのおかげで無事だったと言える。
花瓶が落ちてきたことや階段で人とぶつかって落ちそうになったこともある。
そういうことがノスフェラトゥを追い出した時に限って起こるのだ。ノスフェラトゥが意味ありげに鳴いた時に。
このまま校内で事故が頻繁に起こるのは学園側としては困ることだ。それは猫が校内にいることよりも問題だと判断された。結局、ノスフェラトゥは特別に校舎に入ってもいいことになった。
ノスフェラトゥ自体は悪戯をするわけでもなく、気ままに校内を歩き回る程度の大人しい猫で、校長が餌をやっている姿が何人もの

生徒に目撃されているという話もある。
今やノスフェラトゥも生徒だというのが学園七不思議や都市伝説のように囁かれているが、本当に学生証を持っているというのが冗談みたいな本当の話だ。入学テストを受けて合格したという噂もあるが、真実は定かではない。
だが、そんなことはどうだっていいのだ。

その魔女、徒花星羅が今、彼の目の前にいる。
こうして近くで見ると彼女の佇まいは凛としている。大きな目には不安も期待もない。人形のようにも見える。
そして、彼は口を開いた。
「俺と付き合ってほしい。不幸を前提に」
それが始まりの言葉だった。

1―1

灰岡大輝（はいおかたいき）、十六歳、高校二年生。

容姿は、よく格好いいと言われるが、大方取り入るためのお世辞だと思っている。誰も本当の意味で自分を見ていないと常々感じている。

自己評価は普通、悪くはないだろうという程度だ。それを悲観することはない。体型にも特にコンプレックスがあるわけでもなく、卑屈になる理由が思い当たらない。

運動は特別できるというわけではないが、勉強では努力によって何とか常に上位を保てている。努力のない結果などありえなかった。

悩みなんてないだろう、と誰もが言う。何もかも恵まれていて不自由がなさそうで羨ましいと笑う。

だから、誰にも理解されない大きな、大きすぎる悩みがある。それはとても厄介なものでまず解決は不可能だという代物だった。

諦めるべきだとわかってはいるが、諦め切れない。諦めたら心が死んでしまうような気がする。大袈裟だが、この先の全てを支配する悩みなのだ。

はぁ、と溜息を吐けば背中をバシッと叩かれる。

「何だよ何だよ、いい男が溜息吐きやがって」

カラカラと隣で笑うのは親友の羽佐間拓臣（はざまたくみ）だ。

いつも彼は明るい。それが大輝には羨ましかった。こうなれたら……と憧れすら抱いている。

浅黒いのは元々らしいが、いかにも体育会系で、精悍な顔立ちをした彼は自分よりずっと格好いいと思っていた。

「溜息吐いた数だけいい男じゃなくならないかな……」

「よし、じゃあ、俺にかけろ！　代わりに俺がめちゃくちゃいい男になってやる！　って、違うだろ！」

拓臣はまるで寺で煙を頭にかけるように、手を動かしてみせる。
「お前は十分にいい男だよ。これ以上なる必要ない」
「そうだった」
思い出したように言うその嫌みのなさが大輝は好きだ。
しかしながら、それによって悩みがどこかへ飛んで消えてくれるわけではない。切り離せないものだとわかっている。
「で、何だよ？」
「……女子が、うざい」
さすがにはっきりとは言いにくくて、小声になる。いくらここが屋上で、他に誰も聞く人間がいないとしても。
そして、今までに何度も言ってきたことでもあるが、拓臣が大袈裟な反応を示す。その内芸人を目指したりするのではないかと大輝は思う。
「うっわ、言いやがったよ。モテる男は辛いよ発言！　毎度毎度、それを聞かされる俺の身にもなれよなー」
拓臣もモテるのだが、彼に言わせれば『モテ方が違う！』ということらしい。
尤も、大輝にはよくわからないし、彼のその反応もノリであって、本気ではない。彼の本気は見えにくいところにある。
「だから、代わってくれって言ってるだろ？　全部引き受けてくれよ、マジで」
拓臣に寄り付く女子はまともだと大輝は思っている。拓臣が言うには「女なんて大して変わりない」だが、絶対違うと思っている。
自分のところに来る女子は恐ろしくて仕方がないのだ。
「そりゃあ、三年のマドンナと名高いミドリ先輩まで来た時には心底代わってほしいと思ったけどなぁ……代われるわけねぇんだよ！」
最早、全ての男子を敵に回してしまったような気分ではあるが、拓臣だけは味方でいてくれる。
「俺、もう、やだ。この生活」
こんな弱音を吐ける相手も拓臣だけだった。彼には何でも言える。

数ヶ月の差とは言っても既に一つ年上で、そのせいか昔から兄のように思うことがあった。大輝は一人っ子で、拓臣が三兄弟の長男であることも関係しているのかもしれない。
「そうやって、もう一年はやり過ごしたじゃねぇか。大丈夫だって。このまま、あと二年いけるいける！」
「大丈夫じゃない。もうやだもうやだ！」
大輝は膝を抱えた。子供っぽいとは自分でも思う。それでも、自分に降り懸かった運命から目を逸らしたかった。
「大っ体、お前は真面目すぎんだよ。いい男ってのは、ちょいちょいつまみ食いをしてだな、青春を謳歌して……」
「嫌なんだ！　どうせ、好きな子ができて付き合って将来結婚する約束したってな、大いなる力で引き裂かれるんだぞ！？　夏休みなんか既に悲惨な予定が決まってて、楽しみにする要素がないんだぞ！？　別荘なんて爆発すればいいんだ……うぅっ、俺の青春はどこに行ったんだ……」
親身になってくれるとは言っても、所詮他人事でしかない。それを楽しんでいる部分があることを彼も否定できないだろう。
それに拓臣は恐ろしく要領がよく、楽観的であり、それは真似できそうもない。
「大袈裟な……親が決めた結婚相手がいるってだけじゃねぇか」
「……それが大問題だってわかってるだろ？」
拓臣はさらりと言うが、大輝にとっては認めたくない事実だった。できることならば、全力で消去したい。
「世の中の男共は全力でお前を呪い殺そうとするんじゃねぇかな？　顔はまあまあイケメン、金があって、将来結婚を誓い合った超美人がいて、将来薔薇色だって、みんな言ってるぜ？　何を悩むんだって」
「顔は生まれつきだし、金は俺のじゃねぇし、俺が誓ったわけじゃねぇし、彼女は……俺の中では超美人じゃない。はっきり言って好みじゃない」

そんなことを言って自分でも罰が当たるとは思う。けれど、それならば、婚約が破談になるというものであってほしい。それも、親には何の迷惑もかからないという自分に都合のいい形で。そんなことはあり得ないとわかってはいるのだが。

「この贅沢野郎っ！　清女（せいじょ）の市原茉希（いちはらまき）って言ったら、この辺で知らねぇ奴はいねぇっていうお嬢だぞ！　今年のミス清麗は間違いなしとまで言われてる」

清女――清麗女学園、男子ならば誰もが憧れる女子校であり、その制服の可愛さから入学を熱望する女子も多い。その男女ともが憧憬を抱く学校において一番の有名人であるのが市原茉希である。

「お前が言うなよ。寒くなる」

そのミス清麗も一生疑惑が付き纏い、それでいて誰も暴けないだろうと思えばぞっとして、思わず自分の腕を撫でる。

拓臣もまた彼女を他と同じようには見ていないことを大輝は知っている。

その昔、同じ学校に通っていたと言うのだ。大輝と出会うよりも前、幼い頃のことだと言うが、家族の付き合いは未だ切れないらしい。

つまり、彼もまたそれなりのお坊っちゃんということになるのである。

だが、昔と変わりないという彼女のことを拓臣が褒めることはない。

「俺は他の男子の気持ちを代弁してやってるだけだ。清女だぞ？どんだけの男子がお近付きになりたいと思ってると……」

「だから、お前が言うなよ。本当に白々しいから」

市原茉希に関係なく、彼は皆が憧れる清女の生徒との合コンをセッティングできるのだ。皆が『女のことなら羽佐間に聞け』と言うほどである。

真にルックスが良くて何一つ不自由していないのは拓臣の方ではないかと大輝は思わずにいられない。

「そりゃあ、お前が憂鬱になるのはわかってるけどよ……俺からは気の毒としか言えねぇ。他の言葉はねぇよ」
協力できるものならしたい、と何度も彼は言った。そこに偽りがあるとは思わない。どうにもできないのが現実なのだ。
神頼みをしても状況は全く改善されない。より悪い方向へ着々と進んでいるようにしか思えない。

1―2

「いっそ、好きな子作って駆け落ちしたらどうだ？」
「地の果てまで追っかけ回されそうだ。昔、家出した時、腕にＧＰＳのチップ埋め込まれそうになったって言っただろ？　あれ、成人したらマジで入れるって言われてるんだ。どれだけ俺信用ないんだろう……」
「どこまでも二人で逃げ切って……って、無理だよなぁ。現実的じゃねぇよな。映画じゃあるまいし、全然リアルじゃねぇ。そこまでお前についていくような度胸のある女がいるかも怪しいよな」
　何て非現実的な話なのだろうか。けれど、それがどうしようもない現実だ。
　親にさえ信用されていない自分が嫌になる。
「だから、諦めた。せめて、それまで平和に普通に学園生活送りたいのに、毎日毎日女子に遊びに誘われて……俺の身体が持たないって」
　婚約のことは拓臣ぐらいにしか言っていない。言ってしまえば楽なのだろうが、それはそれで面倒なことになる。何よりも大輝自身が認めたくないのだ。
　たとえば、彼女が本気で好きな男を見付けてくれれば大輝との縁談はなかったことになるはずだが、その気配もなければ女子高では望みも薄い。
「じゃあ、誰か一人犠牲にしろよ」
「は？」
　親友の口から出た物騒な言葉に大輝は顔を顰めた。聞き間違いだと思いたかった。
「犠牲だ、ぎ・せ・い。生贄、スケープ・ゴート、人身御供、わかるか？」
　間違いでないばかりか余計に怖くなってしまった。

「先輩とか同級生に抵抗があるなら、後輩でいいじゃねぇか」
何てことを言うのだろう。まだ後輩までには知れ渡ってないとしても時間の問題だ。去年、全学年に知れ渡ったスピードは彼も知っているだろう。
「前に試しに付き合ってみたけど、結局、金だし。身体だけの関係でいいとか言われるし、何か散々ないこと言いふらされるし……」
大輝は既に懲りている。せめて短い間でも一緒にいる人間を探すなど相手にとっては失礼な話で、その代償は小さいものではなかった。
「そりゃあ、お前の女を見る目がないってこった」
家庭環境のせいでまともな恋愛はできなかった。
拓臣のように要領が良くないのだ。だから、養えるものも養えない。
「それに、付き合うんじゃねぇんだよ。フリをするんだ。ちゃんとした契約を結んで盾にするんだよ。そうすりゃ言い寄ってくる女共も少しはましになるかもしれねぇ」
「契約？」
これまた物騒な響きだ。書面を用意する必要があるのだろうか、大輝は首を傾げる。どんどん現実味がなくなっていく気がする。
「絶対にお前を好きにならないような女子を選ぶんだよ。そんで、そいつが他の女子から何されようと……
「サイテーだな、拓臣」
誰かを犠牲にすること、彼の提案の意味を理解して大輝は溜息を吐く。そんなことできるはずがない。
拓臣にもできるとは思わないが、大輝にはもっと無理だ。
「平和にお前だけが救われる道は絶対にねぇってこった。お前の普通の青春には犠牲が必要だってことだ」
それも認めたくない。複雑な心境だった。
「じゃあ、たとえば、誰がいる？」
聞くだけは害ではないと大輝は聞いてみる。

「……いねぇな。俺もそこまでリサーチしてねぇ」
「それじゃダメじゃん」
拓臣にも明確な考えがあったわけではないようだ。
「大体、真面目なお前が食い付くとも思わなかったし」
どうやら冗談のつもりだったらしい。単に諦めさせるための、初めから実行不可能な提案のつもりだったのだろう。
「……いるとして、そいつだけはやめた方がいい」
「誰だよ？」
「この話は終わりな。諦めろってことだ」
もうこの話は終わりにしたい。拓臣の表情にはそれが滲み出ている。
続けることで、大輝が何かに行き着くのを拒むかのように。その話をしたことを後悔するかのように。
「あ、徒花さん！」
不意に思い浮かんだ名前だった。
「あぁ？」
拓臣の表情は険しい。まるで自分の悪口を言われたかのような反応にも見える。
「徒花さんって、みんな噂してるだろ？」
「頭のおかしい魔女っ子だ」
拓臣は吐き捨てる。明らかな軽蔑が込められている。
「頭はいいって聞いた」
「勉強ができるのとはまた別だろ」
「一回相談してみようかな……」
徒花星羅は魔女であり、その魔女とは他人からの相談を受けるものであると聞いていた。助言を授けてくれるものであると。
「やめとけやめとけ、あの女はイカレてる類だ」
本気で嫌がっている素振りに大輝は怪訝に思う。
「徒花さんと知り合い？」
不本意な知り合いを敬遠するようなニュアンスが感じられたから

こそ、大輝は聞いてみる。
彼の交友関係は幅広く、特に女友達は妙に多いという認識だ。そこに後輩の徒花星羅が入っていても何ら不思議ではない。
「いや、噂で聞いただけだが、お前よりは知ってるさ」
彼のネットワークには着々と情報が集まっているようだ。
けれど、大輝は自分が見て聞いた物を信じたい。それは拓臣を信用していないということではない。
「廊下で見かけたけど、何か上品だし」
「上品か？　あれが？」
「背筋が真っ直ぐで、髪の毛もあれだけ長いのにボサボサって感じじゃないし、きっと手入れが大変なんだろうな……」
「あのな、お前は女を背筋や髪で決めるのか？」
「そうじゃないけど……」
大輝は口ごもるしかなかった。今の拓臣には何を言っても無駄そうだ。
「洗脳されんのが落ちだって。俺はそんなお前見たくない」
拓臣の気持ちがわからないわけでもない。
逆の立場であったら、素直に行かせなかっただろう。
「いや、でも、やらないよりはましだ！」
もう大輝は心に決めていた。悲観するのは徒花星羅に会ってからにしようと。それからでも遅くない。嘆くのはいつでもできる。
「……俺はお前の親友だ」
「うん、いつも感謝してる」
どれほど拓臣に助けられてきたか、わからないほどだ。頼りっぱなしなのかもしれない。感謝してもしきれない。
「でも、身の危険を感じたら逃げる」
「うん、そうしてくれ」
そこに危険があるならば真っ先に逃げて欲しいというのが大輝の願いである。
「俺は我が身が可愛い」

「そりゃあそうだろ」
大輝も拓臣の性格は理解しているつもりだ。
こうして、いつもいつも愚痴を聞かせてすまないと思っている。彼のストレスは合コンなどできちんと発散されているらしいのだが、それでも申し訳ない。
「そして、我が身の次はお前じゃなくて女だ」
「……うん」
それもわかっている。そう言いつつ、大輝のことを優先してくれるのだが、今回ばかりは期待しない。
「わかってるならいい。だが、気を付けろよ。何があってもあの猫にだけは絶対に手出すなよ」
「さんきゅ、拓臣」
何だかんだ言いながらアドバイスをしてくれる彼は真の親友だと思うと胸が熱くなる。自分は本当にいい友達に巡り会えたと思うのだ。

1―3

大輝は廊下を小走りに進んでいた。放課後、とにかく早く彼女を捕まえようと急いでいる。

教室に寄ってみたところ、彼女のクラスは既にホームルームが終わって閑散としていた。こういう時、担任の話の長さが恨めしくなる。

彼女がいればすぐにわかるのだが、その姿はなく、代わりに残ってお喋りを楽しんでいた女子に見付かってしまい、逃げるはめになったのだ。

なぜ、こうも自分はモテてしまうのか。甚だ疑問である。

後輩だと言っても携帯電話を片手に迫ってくる様は全学年共通だと思い知る。

本人には全く理解できないことだが、なぜか大輝のアドレスを手に入れることがステータスになっているらしい。大輝と繋がることで玉の輿的な他の出会いがあると思っている人間もいるくらいだ。

しかしながら、大輝はそれほど社交的な人間でもなく、知り合いの中で思い付く金持ちのイケメンと言えば、拓臣だけであり、交友関係は至って普通である。

徒花星羅の放課後の居場所は決まっているのだが、絶対とは言い切れない。だからこそ、教室で捕まえようと思ったのだが、それが大間違いだった。

こんなことになるなら自分に運があることを祈って直行すれば良かったのだ。

渡り廊下を過ぎた頃には追っ手を撒くことができていた。

皆、わかっているのだ。この先は危険だと。放課後に漂う異様な空気に戸惑いに足を止めてしまう。

大輝が目指すは通称《分室》ただ一つだが、この二棟にはいくつ

かの部が部室として使用している教室がある。
家庭科部、茶道部、書道部、化学部、軽音楽部、音楽部、演劇部、その全てが濃いと言われている。どこも独特の、強烈な個性を持っていて、数々の名物部長の顔を思い浮かべると大輝もこれ以上進みたくなくなる。
放課後の二棟は魔窟と化すと言われているほどだ。これも、おそらく七つよりも多い学園の不思議だが、紛れもない事実だと大輝は二年目にして思う。
目的地はそのまっただ中、生徒会室の隣にある。
生徒会もまた面倒な人間が揃っているからこそ進みたくなくなる。一番濃いのは生徒会に違いないのだから。

奇声が聞こえる教室を過ぎると、その隣に《保健室　分室》の文字が見えてくる。ここそが徒花星羅の居城とも言われる教室である。
前後のドアにある窓には紙が貼り付けられ、中が覗けないようになっている。相談者のプライバシーを守るためだろうか。
そして、《相談受付中》という表示がされている。
ほっとして、大輝がノックをしようとした瞬間、ガラリと扉が開き、中から少女が出てくる。
「あら？」
少し驚いたように彼女は首を傾げる。
「えっと……徒花さんだよね？」
「ええ、そうよ。いかにも、あたくしが徒花星羅だわ」
頷く彼女は確かに徒花星羅だ。確認するまでもなかった。
「相談したいことがあって……」
「あたくしは誰の相談でも受けるわ。どうぞ、中でお待ちになって」
スッと中を指し示すと彼女はすぐに隣の生徒会室へ入っていく。
何か用事だろうかと思いつつ、大輝は室内に入ってみる。

お待ちになって、と言われても困るものがある。手持ち無沙汰で、大輝は室内を見回す。
ここが学園内教室の一つにすぎないとわかっていても、女の子の部屋を物色するような後ろめたさがある。
だが、ガランとしているという印象が強い。四十人分の机と椅子が並べられる教室の中奥には向き合う二組の机と椅子が置かれている。尤も、テーブルクロスがかけられ、クッションまで乗せられている有様なのだが。
なぜか、隅の方には猫のトイレや玩具などが転がっている。
ノスフェラトゥ専用なのだろうが、その姿はない。廊下側の壁には特別に運び込まれたと思われる棚があり、中には本や茶器が入れられているようだ。
ご丁寧に喫茶コーナーまである。

「そちらにお座りになって良かったのに」
少しして戻ってきた星羅は籠を抱えていた。
中央の席に大輝を促し、二つの机の真ん中にそれを置く。中には飴やクッキーやチョコレートと駄菓子類が入っている。
「三木一樹（みきかずき）がお菓子を下さると言うから行ってきたの、好きな物をお食べになって。どうぞ、遠慮なく」
三木一樹、大輝でも知っている人物だ。生徒会長であり、濃いキャラの代表格とも言える。むしろ、諸悪の根源と言い切れるくらいだ。
名前を口にするのも恐ろしいという人物もいるほどだが、彼女は平然とフルネームを口にしている。彼女は誰にでも変わらない態度で接するのだろう。
「あ、ありがとう……」
礼を言うものの、菓子を食べたい気分ではなかった。
「今、お茶をご用意するわ」

「待って」
ぴたりと星羅が動きを止める。
「座ってくれるかな？」
焦っているのかもしれない。大輝自身感じていることだった。
喉は渇いているのに、お茶を待つ間さえ惜しい。
それでも、星羅は何も言わず、向かいの椅子に座った。
じっと見つめてくる彼女はその目で何を見ようとしていたのだろうか。
そして、彼女が何かを言う前に、大輝は口を開いた。

「俺と付き合ってほしい。不幸を前提に」
待っている間、それよりも前から言うことは考えていた。何十回も心の中で繰り返してシミュレーション済みだった。
それなのに、口から出たのは全く違う言葉だった。
「不幸？」
星羅は黙って座っていると人形のようだったが、その滑らかだったはずの眉間に僅かに皺が寄る。
さすがの《魔女》も訝しがっているようだ。
「事情があって君を幸せにしてあげられないけれど、俺を助けてほしい」
言葉はまるで自分の物ではないようにスラスラと出てくる。
そして、星羅は身を乗り出して、顔を近付けてくる。
「徒花さん？」
彼女はじーっと見つめてくる。食い入るように、穴が開くほどに。
どれだけそうしていただろうか。ふっと星羅が力を抜き、背もたれに身体を預ける。
「……あなたの未来があたくしには見えないわ」
「え……？」
大輝は真剣であって、星羅もそれを理解して同じように真面目に相談に乗ろうとしているようだった。

もしかしたら、彼女は冗談が通用しない類の人間なのかもしれなかったが。
「何も見えない。こんなことって初めて。いいえ、あたくしが自分の未来を占えないのと同じだわ。あなた、何か黒い運命に飲まれてる」
困惑しているようにも見える。今までになかったことに遭遇すれば誰だってそうなるだろう。
「自分のことは占えないの？」
「ええ、あたくしは幸せになってはいけないのよ」
だから、彼女は猫がいない時、危険な目に遭うのかと納得してしまう。
「……あなた、お名前は？」
「あ、ごめん。灰岡大輝、二年Ａ組」
「灰岡大輝……灰岡大輝……」
星羅は反芻し、立ち上がると教室の隅へと歩いて行く。
じっと見下ろして、それから大輝を見る。
「灰岡大輝、ちょっとこちらにきてくださる？」
呼ばれて、大輝は素直に応じる。彼女が指さすのは、床に散乱したカードである。それぞれひらがなが一字書かれている。
「これ……？」
「ここを見て」
促されて注目したのは少し離れたところにある六枚だ。十字に並べられているようだ。
問題は形ではなく、並べられている文字だろう。
「かおい……」
「逆よ」
「あっ……」
横に並んだ四枚は『はいおか』と読める。そして、『い』の上下にも『た』と『き』のカードがある。
つまり、その六枚で『はいおかたいき』と表しているのだ。

「これって、もしかして、予言とか……？」
大輝が見ている前で彼女はそれに触れていない。
「ノスフェラトゥのダイイングメッセージね」
至極真面目に彼女は言っているように見えた。
「あ、あの猫死んじゃったの……？」
ビクビクしながら問う。彼女がそんな冗談を言うとは思っていなかったのだが――
「うわっ！」
突如、黒い塊が飛び込んできて、大輝は尻餅をつく。
それは大輝の目の前に着地したかと思うとまた飛び上がる。
一体、何だと星羅を見れば彼女は黒い塊に襲われているところであった。
「ノスフェラトゥ、やめなさい！」
「えっ、猫死んだんじゃ……」
「これが死ぬわけなっ……痛いじゃないの！」
飼い猫に噛みつかれ、引っかかれている星羅は小さな子供のようにも見える。飼い慣らしているとは言い難い。
「まったく、地獄耳でユーモアがわからない猫だわ」
傷だらけになった手をさすりながら星羅は毒突く。どうやら思っていたような関係ではないらしい。
「……大丈夫？」
その問いに大輝の存在を思い出したのか、星羅はさっと顔を背ける。照れているようでもある。何となく白皙の頬が赤く染まって見える。
コホンと咳払いして、仲直りしようとするかのように手を差し出すが、ノスフェラトゥはサッと逃げ、大輝の足下で丸まった。

1―4

「……見えないというのもまた運命ね。少なくともノスフェラトゥは予知していたみたいだけれど」
椅子に座って、星羅は呟く。
「今日、調子が悪いとかじゃなくて？」
大輝もまた向かいに座れば、その膝にノスフェラトゥがピョンと飛び乗ってくる。引っ掻いてくるわけでもなく、大人しくしている。
その様を星羅がひどく羨ましげに見ている気がしたが、触れてはいけない話題のように思えた。
こうして生で見ると不思議な猫だ。オッドアイであること以外、その辺りの野良猫と何ら変わりなく見えるが、先程はとんでもない跳躍力を見せてくれたものだ。
ノスフェラトゥがどこからやってきたかと言えば、壁の上部、開いている小窓しかないだろう。
いくら猫の跳躍力が優れているからと言って並の猫になせる芸当ではないはずだ。やはり、何か特別な魔法でもかかった猫なのだろうか。
もしかしたら、本当は猫ではないのかもしれない。そんな馬鹿なことさえ考えてしまう。
「三木一樹は見えたのよ」
「それはそれで凄いけど……」
あの傍若無人とも言われる生徒会長三木一樹の未来など見るのも恐ろしいものだ。
その彼女（男のような名前だが、歴とした女である）から籠一杯のお菓子を貰う星羅は一体何者なのだろうか。気になるが、問いかけたところで《魔女》以外の答えが得られるとは思えない。そもそも、一樹のことに触れるのはタブーのように思えてしまう。
「あと、三木一樹の下僕達もいつも通り」

下僕とは他の役員達のことだ。一樹に使われている彼らは不憫だと大輝も常々思っている。

「あたくし、あなたと契約するわ」

その言葉を聞いて大輝はほっとする。だが、安心しきるのはまだ早い。

「いくつか、条件を出させてもらうけどいいかな？」

まだ大輝に都合がいいとは言えない。交渉はこれからだ。

「あたくしも出させていただくわ」

当然そうくるだろうとは思っていた。一方的な契約は強要でしかない。

だが、この少女は無理な要求はしてこないだろうと感じていた。

「一つずつ言っていこうか。フェアになるように」

良好な関係を続けるにはフェアでなければならない。

星羅が可愛らしい猫のメモ帳を出すのを見て、大輝は少し待つ。

それから彼女は黒猫が付いたペンを取り出す。

どうやら彼女は猫好きのようで、そう思うとノスフェラトゥに好かれていないのが不憫に感じられる。

「じゃあ、俺から一つ、知り得たことは一切他言しないこと」

「それは当然のことだわ。では、あたくしからも、ここに出入りするのなら、秘密は厳守すること」

「これは共通事項だね」

サラサラと星羅はメモに書き留めていく。

「じゃあ、一つ、期間は最長で俺が卒業するまで。多分、それよりは短くなるだろうけど、君はそれに従うこと」

「ええ、従うわ」

二年にも及ぶような契約には、さすがに何か言われるのではないかと思っていたが、星羅はすんなりと受け入れた。

「けれど、魔女はあたくしの生業、人生の全て。どんなことがあっ

ても、絶対にやめない。侮辱は絶対に許さないわ」
「しないよ。邪魔もしない。それでいいかな？」
彼女は《魔女》としての活動に支障が出なければ、どうでもいいのかもしれない。
「じゃあ、一つ、俺と付き合うのはフリ、絶対に好きにならないでほしい」
この項目に関しては一番不安があった。正直、女は信用できないというところがある。
「あたくしは誰も好きになれないもの」
「誰かを好きになったことは？」
「いいえ、これから好きになるとも思えないし、なったところで、あたくしは何も求めないわ。絶対に――この世における絶対という言葉の信頼性は地に墜ちているかもしれないけれど」
目を伏せながら淡々と語る星羅に大輝の胸が痛む。
恋を知らない彼女の、これから知るかもしれない未来を自分が二年分も奪うのは心苦しいものがある。
万が一、彼女が自分を好きになってくれたとしても何もしてあげることはできない。今更ながらにこの契約の残酷さを思い知る。
（この子は信用してもいいのかもしれない）
拓臣に言えば根拠のない危険な考えだと一蹴されるかもしれない。
それでも、信じてあげたいと思ってしまうのは、女に騙されやすい体質だからということなのか。
拓臣の言葉通り、自分は彼女を犠牲にするのだ。せめて不信は抱かずにいてやりたかった。こうして向き合っている彼女は一人のか弱い少女なのだから。
「あたくしの条件を言っても？」
「ああ、うん、ごめん、話逸らしちゃって」
「当然の権利だわ。あなたは、あたくしを利用するために色々知る必要がある」
物わかりがいい。良すぎるのかもしれない。

淡々と遠慮のない物言いは大輝にとって不快なものでもない。
拓臣は反対していたが、彼女ほどの適任はいないのかもしれない。
「ノスフェラトゥには決して危害を加えないこと。侮辱もいけないわ。命の保障はできないから」
「うん、どうなるかはよくわかったよ」
シュンと俯いた星羅はノスフェラトゥと仲良くしたい気持ちがあるのだろう。だが、ノスフェラトゥは星羅には全く懐いていないようだ。ただ一緒にいるだけ、あるいは、ノスフェラトゥの方が偉いようにさえ感じられるほどだ。
なぜ、ノスフェラトゥなのかということについて聞くのは今度にした方がいいのかもしれない。膝に乗られてよく見ている内に気付いたが、ノスフェラトゥはメスであって、かなり不似合いな名前に思うのだ。

「他にはある？」
「今は思い付かないわ」
「俺も、また何かあったら言うよ。いいね？」
拓臣ならあらかじめ書面を作り、サインまでさせるという徹底ぶりを見せたかもしれないが、そこまで周到にはなれない。
「秘密は厳守って言ったけど、一人だけ例外がほしい」
「あたくしは構わないわ」
彼女は断らないと、どこかではわかっていた。
「親友の羽佐間拓臣。今度、紹介するよ。君は？」
「敢えて言うなら、三木一樹だわ。彼女はとても鋭いから」
できれば、出てほしくなかった名前だと大輝は心の中で落胆した。敢えて言わないでくれた方が良かったかもしれない。
最もお関わりになりたくない人間に、こんな形で接近するのは避けたかった。
ここまでの感じから三木一樹は星羅を可愛がっていると思って間違いないだろう。生徒会室に呼び寄せて、籠一杯の菓子を与えるほ

どだ。
たとえ、本人が快諾してくれたとしても、不幸が前提の付き合いだ。偽装カップルの証人になってくれなどと頼んだらどうなるかはわからない。
しかしながら、後で知られるともっと恐ろしいことになるかもしれない。
最初の恐怖と後々の恐怖、天秤にかけるまでもないことだった。
「隠し立てしないで協力してもらった方が得策かな？」
「彼女を通して見えるものがあるかもしれない」
未来が見えない二人、そう思うと不安がある。見えることが当然ではないが、本来彼女は見えなくて当然なものが見えているのだ。
「俺が一つ年上だからって、遠慮しなくていいから」
彼女を利用することにはまだ引け目があった。彼女が我が儘を言い出した時に困るのは自分だとわかっているのに、強気に出ることはできない。
「してるつもりはないわ」
「それなら、いいんだ」
これから彼女を知っていく必要があるのだろう。
「あたくし、三木一樹を呼んでくるわ」
「えっ……そんな急に……？」
立ち上がった星羅に大輝は慌てた。心の準備が全くできていない。
「善は急げと昔から言うじゃない」
「でも、生徒会長って忙しいんじゃあ……」
そんな急に来てくれるはずない。思ったのだが、星羅は足を止めることなく、スタスタと出て行ってしまった。

1―5

居たたまれない。
床に正座をして、大輝は今すぐにでも逃げ出したいと思っていた。
膝の上ではノスフェラトゥが無防備に寝ている。これさえいなければ、これさえいなければ……と思わずにはいられない。
無理に退かせば、星羅のようにバリバリと引っかかれてしまうかもしれない。それも嫌だった。
見上げた先では女子二人による優雅なお茶会が行われている。
どこの教室にでもあるような机と椅子にクロスをかけただけのものだが、妙に華やかに見える。
一通り菓子を楽しんで、一樹は大輝を値踏みするように見た。
「噂の御曹司、か」
「あんまりそう言われたくないんですけど……二年の灰岡大輝です」
「うむ」
金持ちの子供が多いと言われるこの学園で灰岡の名は知れ渡ってしまっている。
そもそもの間違いは親に決められたこの学園に入ってしまったことなのかもしれない。もう少しばかり密やかな生活を送りたいというのは贅沢なのだろうか。
「えっと、事情があって」
言わなければと思うのに、彼女の雰囲気に威圧されてしまう。
三木一樹は小柄ながら、武術に長けていると言われる。どんな目に遭わされるか考えるだけでぞっとする。
大輝は完全に萎縮していた。
「あたくし達、お付き合いすることになったみたい」
「みたいじゃなくて、なったの」
さらりと言い放った星羅に大輝もとっさに付け足す。その瞬間、ガタッと音がする。一樹が椅子ごと動いた音だった。

「せ、星羅に、か、彼氏……！」
口に手を当て、ワナワナと震える一樹に大輝は考える。
このまま歯を食いしばり、目を閉じて頬を差し出すべきか。
だが、一番の問題は肝心なことをまだ言っていないということだ。
「いや、あのですね、その……」
言わなければ、言わなければと思うのに、口がもごもごしてしまう。
すると、星羅が立ち上がり、一樹にティッシュを差し出す。
そのティッシュも黒猫のぬいぐるみのようなケースに入っている。
「わかってるわかってる。偽装でしょ？　ずびぃっ……いや、なんか一瞬にしてお父さんが乗り移ってさ」
「あなたは三木一樹のままよ」
星羅は冷静だった。冗談がわからないのだろう。
「二人って付き合い長いんですか？」
「今、何日目だっけ？」
鼻をかんで、一樹は首を傾げる。
「あたくし、三木一樹とは知り合ったばかりなのよ」
「そうそう、お隣に越してきたって感じで」
短い付き合いのようには見えないのだが、一樹は世話好きなのかもしれない。
「別にあたしは怒んないよ。むしろ、同情してるよ、灰かぶり（シンデレラ）王子」
涙と鼻水が治まり、一樹はまた大輝を見る。うんうん、と頷いているが、大輝は首を傾げるしかない。
「いや、俺、そんな風に呼ばれたことないですけど」
「事実上の許嫁いるでしょ？　清女の市原茉希」
大輝はギクッとした。なぜ、彼女がそれを知っているのか。
「あたし、そっちの方詳しいからさー、うん」
「はぁ……」

「君はせめて今だけはその事実を隠して思う存分青春を謳歌したいけど、金目当てのハイエナどもが群がって平和な学園生活どころじゃない。星羅じゃなくてもわかることはあるんだよ」
一樹はニッと笑う。改めて生徒会長の恐ろしさを知る。
彼女もまた金持ち関係の人間なのかもしれない。
「いいんじゃない？　星羅だってさ、こんなことがなければ一人っきりで魔女続けてくんでしょ？」
殴られるのではという危惧は一気に吹き飛んだ。
彼女は噂とは違い、案外話がわかる人間なのかもしれない。
やはり噂とは当てにならないものだと大輝はホッとしていた。
「まあ、安心しなよ。あたしが協力してあげる」
何て頼もしいのだろうか、感動すら覚える。これほど理解してもらえるならば、もっと早くに知り合いたかったと思うほどに。
「星羅、わかってる？　登下校は一緒。毎日、車だよ」
彼女が言うことは正しいと言えば正しい。言わなければ星羅はわかっていなかったかもしれない。
だが、彼女の情報は間違っているようだ。
「いや、俺、チャリですけど」
ちらりと一樹は目を向けてきたが、すぐに星羅に向き直る。
「お弁当も一緒に食べるの。毎日お重に入った豪華な……」
「基本的に学食ですけど」
遮って言えば、ぴたりと一樹が止まる。ここは最早情報ではなく、勝手な思い込みなのかもしれない。
どうしたのだろう。大輝が首を傾げているとノスフェラトゥがひょいっと膝から降りてどこかへ消えてしまった。
不思議に思っているとヒュッと何かが頬を掠めた。
ぞっとして、身体が硬直したまま、視線で追うと駄菓子が転がっていた。
「乙女の夢をぶち壊すなーっ！　このクソ御曹司っ！！」
やはり理不尽だった。

一樹は殴りかかってくるわけではないにしても次々と菓子を投げてくる。それも滅茶苦茶に投げているようで狙いが正確だ。
「痛い！　地味に痛いですから！　徒花さん、助けて！」
額を押さえた手に菓子が当たってはポトリポトリと落ちていく。
「両方とも三木一樹のことじゃない」
星羅は呟き、菓子を拾い集める。また一樹が止まる。それからべたーっと机に突っ伏した。
「灰岡の坊ちゃんがあたしに劣るなんて……！」
「俺、そういういかにもな金持ちになる自分が嫌で周りを説得したんで」
一体、自分を何だと思っているのか。溜息が出そうになるが、余計な刺激はするべきではなかった。
そういった思い込みを押し付けられたことは何度もあるが、一樹に言われるとは思わなかった。彼女はこちらの事情を知っていたのだから。
「でも、自転車は電動付きに決まって……」
「まだ言いますか。普通のチャリですって。高級自転車で学校に通うなんて正気の沙汰じゃないですよ」
どこの世界の少女漫画だろうかと大輝は思ってしまうものだ。
「うぅっ……」
「まさか三木先輩は高級自転車にお乗りに……？」
まずいことを言ってしまったかと大輝は不安になる。
「三木一樹は自転車に乗れないの」
グサッという音が聞こえた気がした。
高校三年にもなって自転車にも乗れないのか。それを言ってしまえば、今度こそ命がないかもしれない。
「あたくし、猫みたいだから三木一樹が好きなの」
「猫……」
そう見えないこともない。言われてみれば、そうとしか思えなくなってしまう。彼女は確かに猫に似ている。

大人しくしていれば生徒会長としての妙な風格があるが、キレてしまえば手が付けられなくなる。
顔も吊り上がり気味の二つの大きな目の距離が近く、何だか猫っぽいのだ。
大輝は一樹が星羅の保護者だと思っていたが、実際は逆なのかもしれない。星羅ほど冷静に対処できる人間はいないだろう。
面と向かって猫みたいだから好きなどと言えるのは彼女以外に存在しないだろう。
「とにかく頑張ろう！　ね？」
一樹がひしっと星羅の手を握った。今度はお母さんが乗り移っているのかもしれないが、この場合、一番不安なのは一樹の方だった。
ふと、星羅の両親が気になったが、聞けそうになかった。

そうして、大輝と星羅の偽装カップルはスタートしたのだった。

2―1

羽佐間拓臣は、大輝とは小学校の途中からの付き合いがある。ほんの数ヶ月だが、今は大輝より一つ年上だ。そのせいか、兄のような気持ちもある。

実際、二人の弟がいるというのも関係しているかもしれない。大輝のことは三人目の弟のように思っている部分がある。

そんな大輝の悩みが年々深刻化していることにも気付いていた。

正式にはまだ発表されないが、彼との結婚がほぼ決まっている市原茉希と拓臣は幼稚園からの付き合いがある。

今も家族同士の関係は切れることがないが、婚約相手が自分でなくて良かったと思っている。

市原茉希は幼少の頃から関わりたくない女だった。我が儘で、何でも思うようにしたがる様はさながら女王で、噂を聞く限り未だ変わらないようだ。変わるはずもないのかもしれない。

拓臣は友人として大輝が好きだ。死ぬまで友達でいるだろうと思っているからこそ、不憫で仕方がなかった。

なぜ、大輝のような心優しい男が彼女との人生を今から決められなければならないのだろうか。政略結婚など馬鹿馬鹿しい。あの性格では貰い手に困る彼女を体よく押し付けたいに違いないのだ。そこが灰岡の家ならば、何の不満もないだろう。

できることならば、助けてやりたかった。だが、問題は拓臣の力も羽佐間家の力も全く敵わないとこにあり、今まで何もできずにいた。そんな思いからうっかり偽装カップルの話をしてしまったのは間違いだったかもしれない。

まさか、大輝があの徒花星羅を選ぶとは思っていなかった。

そして、彼女が快諾したことを大輝からメールで知らされて自分を恨んだ。これでは彼が救われない。

だから、拓臣は部活の朝練の後、星羅がいる教室へと向かっていた。こうなれば自分にできることは一つである。
彼女に恨みはない。知り合いというわけではない。だが、噂ならば大輝以上に知っている。大輝はいいところしか信じていない。

星羅を見つけるのは簡単なことだ。呼んでもらうまでもなく、彼女に近寄る。
教室に入った途端、黄色い声が聞こえたが、微笑むだけにしておいた。
「ちょっと話があるんだけど、いいかな？　すぐ終わるから」
教室で話すのはまずい。彼女は素直に頷いた。だから、近くの空き教室に連れて行く。

「俺は大輝の親友の羽佐間拓臣、以後よろしく」
自分のことを話したということは聞いていた。昼休みにでも引き合わされるだろう。だが、その前に手を打っておきたかった。
星羅は何も言わずにじっと見てくる。それが彼女のくせなのかはわからないが、居心地の悪さを感じる。
「大輝から聞いてるだろ？　協力するよ。偽装カップルとは言っても、大輝と付き合うんだから」
「あなた、心と真逆のことを平気な顔で言えるのね」
「真逆？」
拓臣は眉を顰める。
「あなたは、あたくしに協力なんかしたくない」
「おいおい、そりゃあひどいぜ、徒花さん」
やはり彼女は《魔女》らしい。見透かされていると思いながら、拓臣は平静を装う。
けれど、彼女は欺けなかった。
「あなたが友達思いなのは本当ね。でも、あなた、あたくしを軽蔑している。灰岡大輝から引き離したくて仕方がないの。そのためな

ら、きっと、どんなことでもできる」
「……読まれてるなら、隠す必要もねぇか」
ただのイカレ女ではない。それを思い知らされた瞬間だった。
「あたくしの前で隠し事をしても無駄になるわ」
「プライバシーの侵害だ」
どうしたら、心に鋼鉄の盾を持つことができるのだろうか。
心は誰にも読まれない聖域であるはずなのに、この《魔女》は悠々と土足で踏み込んでくるのだ。
「あたくしが心を覗き見ていると思っているのなら心外だわ」
「ユーモアのある会話のつもりか？　魔女」
会話は成立するにしても気味が悪い。拓臣は吐き捨てるが、彼女は全く表情を動かさなかった。人形のようにすら思えてしまう。
「あたくしには色々なセンサーがあるの。嘘を発見するセンサーや自分に向けられる感情を察知するセンサー。その組み合わせで心を読んでいるように思わせるのよ」
人間嘘発見器、きっと表情などを見ているのだろう。洞察力が優れているのかもしれない。それがトリックか。
そうとわかっていても、読まれないようにするのは難しい。
黙っていればわからないことをわざわざ明かす理由がわからないが、さっさと要件を言ってしまった方が良さそうだった。
「大輝と別れろ」
「望んだのは彼の方」
そんなことは知っていた。なのに、苛立つ。
「何で断らなかった？　お前も金か？　いくら積まれた？」
「あなたは灰岡大輝が絶対にそんなことをしないと知っている」
星羅は怯えもせず、淡々と返してくる。
確かにそうだが、この女に何がわかるというのだろうか。
この女が大輝のことを自分以上に知っているはずがないという思いが拓臣の中にはある。だから、彼を守れるのは自分だけなのだと思っていたかった。実際は無力であるというのに妙なプライドがあ

った。
彼女のような厄介極まりない人間が入ってくればどうすることもできなくなると感じていた。
「あたくし、彼の未来が見えないから引き受けたの」
「あいつの未来？」
「そう、あたくしの未来と同じように、今は暗澹としているの。珍しいのよ、そういうことは」
「そんなの、俺が信じるとでも？」
彼女の言うことなど信じられない。信じられるはずがない。
「でも、あたくし、あなたの未来……と言っても、ちょっと先のことは見えるのよ」
「俺の未来？」
なぜ、こんなにもイライラするのだろうか。
自分には彼女が見えないのに、一方的に見られているという感覚のせいだろうか。
「良縁はいずれ降ってくる。今は待つ時、焦れば面倒なものを引き寄せるわ。良縁は寝て待て、よ」
余計なお世話だ、と拓臣は思う。
大輝とは違い、拓臣は日々合コンなどに忙しい。女の扱いはわかっているつもりだった。どうせ、適当なことを言っているだけだと聞き流すことにした。
「とにかく、大輝とは早く別れてくれ」
「それは、あたくしが決めることじゃない。灰岡大輝におっしゃって」
「大輝には言えねぇから来てるって、わかってるだろ？」
自分からけしかけた形で、やめろと言うのはありえない。
けれど、これ以上話しても無駄なようだった。こうなったら、自分が相応しい人間を探してやるしかないだろう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6212x/

マーガ

2011年11月5日17時05分発行